明治四十年四月一日創刊　令和四年一月一日　通巻第一、三七九号（毎月一回発行）

# 和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会

会長　間島誉史秀

## 北海道神宮献詠　一月兼題　「来（る）」

村田俊秋先生選

赤松に積もれる雪を見つつ思ふ孫進学の日の早く来よと　選者　村田俊秋

新しき年の来たりて境内は笑顔溢るる人に満ちをり　会長　間島誉史秀

バスが来れば「ビーダブッチ」と吾子の言ふ妻が通訳「ＪＲバス」と　天位　遠田信之

「いろは歌」の時間の来るに一年生は競ひて諳ず「酔ひもせず」まで（古文入門の授業）　地位　信田日裕

境内に霜柱立ちサクリサクリ足音鳴らし冬の来たれり　人位　片石辰弥

大掃除手を抜きガラスを磨くのみ窓より来たれ寅年の春　秀逸　梶谷久寿美

あらたまの年の来たりて四十二歳自己を見直す本厄の年　秀逸　村井之介

雪の夜に狐の来たりて我を見上ぐ暫し見合ひて走り去るなり　秀逸　南貴子

この年も暮れ近づきて色いろの暦送られ来たるが嬉しき　佳調　石川弘子

来たる年寅年なりていつの間に還暦迎ふる吾娘に思ひのゆく　佳調　新谷英子

傷ついた心も身体も時来ると痛みの消ゆるも傷痕残り　佳調　宮城涼

来る毎日家事しか出来ぬ我なれど只それだけでも勿体なさに　加藤紀恵子

京都駅東京から来る友人と畏れ多くも旧常盤御所へ（浄香様講和会へ）　八尾師絹子

あらたまの年が来たりて祝ひゐる歳旦祭の朝の賑はし　吉良忠誠

新年の無事に来たるを思ひつつ神棚を清む夫を偲びて　室岡和子

半世紀経て来る結婚記念日は11（いい）・22（ふうふ）の日さてわが夫婦は　原里子

祖母に会へず二年を迎ふる新年も新株来ると迷ひの初日　楽間直之

すぐ溶くる師走の雪と暖かさ春来たるかと木の芽も戸惑ふ　鎌田憲子

孫が来て年末掃除はそつちのけホッコリ笑顔に心は清まる　中島正倫

いい波が来るよと車を走らするボードを積んで浜厚真（はまあづま）まで　後藤優美子

窓からのすきま風塞ぎ母は言ふガタは来てても都なんだと（築五十年）　須田真矢

網走から十五年来の友来たる昔話に夜が更けゆく　岩間亜有加

# 総評

**天位**（遠田　信之）

子ども言葉はそのまま詩となる。この「ビーダブッチ」を中心にしての吾子の幼いおしゃべり、口元、表情、ＪＲバスを見る目が詩を作っている。通訳の妻も詠み込んでのこの作品、年初の傑作。とても楽しい一家全員による一首。

**地位**（信田　日裕）

「いろはにほへと」ではない。「色は匂へど」である。涅槃経の「諸行無常、是非滅法、生滅滅已、寂滅為楽」を和訳したものと伝えられているが、作者はこの偈も含めて授業をしたのであろう。暗記する生徒たちの声が聞こえる。

**人位**（片石　辰弥）

朝早くの境内。見まわりであろうか。冷え込んだ朝で霜柱が。これを静かに踏んでいくとサクリサクリと音がする。この音で冬到来を感じたというのである。視覚、聴覚、皮膚感覚で冬到来を伝えている。冬近き日の一首。

**秀逸**（梶谷久寿美）

年末の大掃除。「手を抜きガラスを磨くのみ」とある。これで十分に生活の場はきれいになったのである。輝いている窓。そして呼びかける。「寅年の春に」。「窓より来たれ」と。いろいろな思いを丑年の向こうへ追いやり、明日への思いをしっかり抱こうの心が伝わってくる。

**秀逸**（村井　之介）

新しく迎える寅年は、作者四十二歳の本厄であるという。これを乗り超えるべく「自己を見直す」という。この強い意思には寅もたじたじであろう。自らへの励ましの作。厳しい冬にふさわしい一首。

**秀逸**（南　貴子）

東川で農を営む作者。狐が作者の傍にやってきたのは雪の夜とある。何か用事があって外に出ていたのだ。人に馴れているのであろう。作者と見合って後、去っていったという。食べものでも請うてきたのであろうか。去っていった姿に少しばかり寂しいものを感じたのであろうか。そこからの作。

**佳調**（石川　弘子）

年末になると暦がたくさん送られてくる。たとえば月めくりのもの。その表紙を眺め、一枚だけめくって一月の絵模様を見つめる。それぞれの暦にある趣。これらに触れ、いただいたことと合わせて、うれしさを味わっているのである。

**佳調**（新谷　英子）

自分も年を加えていくが、ふと娘のことを考える。そうか、もう還暦かと、自分のことを忘れて娘のことを考える母親としての作者。「私も元気で過ごしたいから、おまえも一層、元気になれよ」と心で呼びかけているに違いない。そう考えさせる作。

**佳調**（宮城　涼）

年の暮れであるから思うのであろうか。様々な出会いに心もからだも傷みを負うことがあるのだ。時間の経過の中でそれは消えてゆく。しかし傷痕は残るという。人が生きるということは、こういうことですと教えてくれる一首。

札幌興風会　一月兼題㈠　「榊」

村田俊秋先生選

旬祭に榊を供へ献詠す月の二十日は己の清まる　天位　室岡和子

**評**　毎月二十日は旬祭の日。同時に興風会の献詠祭。神前で詠じられるのは、天、地、人位に推された作品であるが、その作品を耳に聞き、心で捉えて作品世界を味わい学ぶと共に、己の歌境を清めるというのである。真摯な作者による一首。

榊の葉永遠(とわ)の緑に生命見る異国で祀るは常緑ヒノキ　地位　宮城　涼

**評**　アメリカで生活している作者。榊に代えてヒノキを用いるという。この地で手にしても「生命を見る」という。常緑のヒノキであることも理由であろうが、やはり「祀る」という、榊を通しての日本人の生命への思い、神への畏敬の念が大きくあるからだろう。異国にある日本人の心を教えてくれる。

造花から正月だけは真榊にそが神棚に映えて清(すが)しき　人位　須田真矢

**評**　普段は造花。しかし正月を迎えるにあたっては真榊を神棚に供えるという。その真榊が神棚に映えているところから「清(すが)しき」思いを一層、抱く作者なのである。そこからの作。

神棚の榊と米、酒、水をかへ鮭の頭を供ふる大晦日（実家）　秀逸　岩間亜有加

榊の葉を一枚一枚拭きてゆく御皇族の玉串と聞き手の震へ（学生時代靖国神社の実習で）　秀逸　遠田信之

真榊に玉鏡幣(たまかがみへい)飾りつけお飾りしてはリース代はりに　秀逸　後藤優美子

新嘗の御祭を前に玉串の葉を拭き清めし一枚一枚（学生時代の実習にて）　佳調　片石辰弥

朝ごとに榊の水を新らしく柏手を打ち祝詞をあぐる　佳調　八尾師絹子

神前に榊ささぐる緊張感遠のきし以前の恵みは今も　佳調　加藤紀恵子

新年を迎ふる仕度の店先につややかな榊ほのかに匂ふ　石川弘子
神棚に榊を供へ新しき月の始めに無事を祈れる　新谷英子
参道の杉わ榊に枝間より見ゆるは朝日の鏡とも思へる　鎌田憲子
神前に榊を供へご神酒をいただく度に背筋伸びゆく（神宮にて）　原里子
「じいちゃん」と親しく呼んだ人なりし榊を回してそつと置きぬる　南貴子
店頭に供花と並ぶつややかな緑の榊墓地の花屋の　梶谷久寿美
濃き緑目に鮮やかなる真榊を供へ新年の準備始めむ　信田日裕

## 札幌興風会　一月兼題㈡　「筆」　村田俊秋先生選

筆先をなめて目尻に朱を入れるをどりのけい古に出かける朝の　天位　重川啓子

**評**　日本舞踊の今日は稽古日。さてと、化粧をするのである。まなじりに朱を入れるために小筆の先をととのえ、そして朱を。舞踊にいくためのこまやかな準備のその一つを見せてくれている作品。結句の「出かける朝の」の納め方に、忙しいのだが心はずみを抱いているものを伝える。

手に取ると温もりくれる鉛筆を使ふ場も無く捨つるも難く　地位　宮城涼

**評**　鉛筆というと小学校、中学校時代を思い出す。小刀で削ったことも。作者も今、その鉛筆を手にしているのであろう。ずっと勉強の時に傍にいてくれたのだ。暖かい。今日にあってはパソコン。使う場がない。しかし「大事なので」捨てられないのだ。

礼状を書く筆までも奪はむとす探求者なる二歳児の吾子　人位　遠田信之

**評**　二歳児を「探求者」と呼ぶ。作者が礼状を書いているその筆を「奪はむ」としたからである。何にでも関心を寄せるのだ。「こらっ！」と言わずに「探求者」と述べるところに子への暖かい目と期待を寄せていることが分かる。

一枚の賀状に浮かぶ優し気な笑顔に向けて筆を運びぬ　秀逸　原　里子

歳の末御朱印用の我が小筆をぬるま湯につけ残る墨溶かしぬ　秀逸　片石　辰弥

つじつまの合はぬ便りに戸惑へど筆まめな友よ穏やかな日を　秀逸　梶谷　久寿美

筆文字ですらすらすらと書きたいな自作の和歌(うた)をこの短冊に　佳調　後藤　優美子

化粧筆に茶色を含ませ目の際に弛んだ我が目のたちまち締まりぬ　佳調　南　貴子

唯一度息子の得たる書道展「推薦」の賞状今も飾れり　佳調　信田　日裕

テレビには若き書道家が感謝の字時代を反映カラーにて書く　八尾師　絹子

年初め筆を持つことに感謝して和歌の韻律に墨も踊れる　小川　紫織

永年を絵画に入れこみ今は昔絵筆ゑのぐも手離せぬ我　加藤　紀恵子

休日の半日を潰し筆をとる滝川の友へ慣れぬ手紙を　岩間　亜有加

朱のはずが流行りは七色十色かな流されぬぞと筆整へる（御朱印）　須田　真矢

すらすらと筆をすべらせ短冊に入選歌書くを夢にみたる日　新谷　英子

天・地・人の短歌を美しくしたためる筆のたしかなる遠田さんに感謝　室岡　和子

コロナ禍に紙をひろげて筆をとる思ひのほかによくかけたるよ　石川　弘子

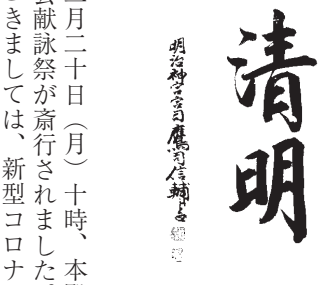
## 札幌興風会　一月兼題㈢　「雑　詠」

村田俊秋先生選

いただいた小さなみかんに顔を描くこたつの上に橙の雪だるま　天位　岩間亜有加
葉をたたみ夜には眠るオキザリス紫の濃淡に心もなごむ　地位　室岡和子
またひとつ年齢(とし)を貰ひてひたすらに遠い道のり歩く決断　人位　重川啓子
我も子も「サンタ」と言はぬクリスマス卒業したのか探るも出来ず　秀逸　南　貴子
ジャンプ台作ると妻は雪を積む開き直りはK点を超える（突然の大雪に）　秀逸　須田真矢
妻の居るホスピス通ひの老友を助ける日日は優しく過ぎる　秀逸　宮城　涼
最年少藤井竜王四冠に令和の王者の読み速く深く　佳調　八尾師絹子
雪降らぬ師走の落葉のかがやきて朝のひととき霜の薄化粧よ　佳調　鎌田憲子
街灯の光に浮かぶ雪の舞ふ冬至に日の出を待ちてをりたり　佳調　小川紫織
家事などに解放されて娘(こ)と見上ぐホテルの窓に十六夜の月　原　里子
外出もままならぬ我が友と電話「お互ひさまね」と会話ははづむ　加藤紀恵子
吾子との闘ひ和室の障子の開け閉めに突つ張り棒で対抗する妻　遠田信之
コロナ禍に耐へて二年の過ぎ行くよ健やかな世をひたすら願ふ　梶谷久寿美
娘の友にいただきたりしエプロンつけ食器棚拭きぬ年の暮れ念入りに　新谷英子
ありし日の続くがにふと思ほゆる暮れゆくことしに君はいまさず　石川弘子

## 会のたより

令和四年の初春も皆様方におかれましては益々ご健勝にてお迎えのこととお慶び申し上げます。本年も何卒、宜しくお願い申し上げます。




「清明」　鷹司信輔
興風会顧問（昭和二十六年九月～三十四年一月）

●十二月二十日（月）十時、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行されました。歌会・勉強会につきましては、新型コロナウイルス感染症を考慮し中止と致しました。
【参列者】村田先生、鎌田、八尾師、室岡各会員の以上四名。

●二月二十日献詠祭ご参列のお願い
新型コロナウイルス感染症を考慮して、二月も献詠祭のみとし、歌会並びに勉強会は中止することと致しました。皆様におかれましては献詠祭にご出席下さいますよう、お願いを申し上げます。
（事務局・遠田）

## 「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年（一九〇七）四月、当時の札幌神社（現北海道神宮）宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていましたが、昭和五十年（一九七五）一月から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の旬祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。歴代の点者（ご指導頂いている先生）は、宮中御歌所参候、小杉榲邨を初代として、御歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の旬祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。

現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができ見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ち致しております。

一、場所　札幌市中央区宮ヶ丘四七四
　北海道神宮社務所
一、開催
　毎月二十日
　午前十時より旬祭並献詠祭（本殿）
　午前十一時より歌会（慶陽館・あすなろの間）
　正午より短歌勉強会（慶陽館・あすなろの間）
一、月会費　三千円（うち玉串料千円）
※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。
一、その他
①毎月二十日、本殿にて旬祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げています。また、その月に誕生日を迎える方にも別にお祝いの記念品を贈呈しています。
②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的に歌集『興風』を発刊致します。
③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。
④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

## お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局　TEL〇一一―六二一―〇二六一
担当　北海道神宮教化部　遠田（とおだ）

## 札幌興風会　令和四年兼題

| 月 | 北海道神宮献詠 | 興風会（一） | 興風会（二） | 興風会（三） | 明治神宮献詠 |
|---|---|---|---|---|---|
| 一月 | 来（る） | 榊 | 筆 | 雑詠 | 暦 |
| 二月 | 緊（し）まる | 氷柱（つらら） | 長靴 | 〃 | 車 |
| 三月 | 急ぐ | 雪解 | はがき | 〃 | 雛 |
| 四月 | 舞ふ | 春雨 | かばん | 〃 | 園 |
| 五月 | 晴る | 岸 | 椅子 | 〃 | 若葉 |
| 六月 | 笑む（ふ） | 畑 | 園 | 〃 | 宿 |
| 七月 | 寄る | 果物 | 扇風機 | 〃 | 夏の花 |
| 八月 | 詣づ（参る） | 霧 | 壁 | 〃 | 泳ぐ |
| 九月 | 実（稔）る | 峰 | 傘 | 〃 | 手紙 |
| 十月 | 書（描）く | もみぢ | 厨（くりや） | 〃 | 近 |
| 十一月 | 添ふ | 霰（あられ） | 窓 | 〃 | 菊 |
| 十二月 | 満つ | 月 | 餅 | 〃 | 宝 |

## 令和四年二月兼題

一、北海道神宮献詠　「緊（し）まる」
二、札幌興風会兼題　（一）「氷柱（つらら）」
　〃　（二）「長靴」
　〃　（三）「雑詠」

**※締切り　一月二十五日（火）必着**

三、明治神宮献詠　「車」
※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意下さい。所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四-八五〇五
札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地 北海道神宮社務所内
札幌興風会事務局
電話　〇一一(六一一)〇二六一
発行人　間島誉史秀
編集人　遠田信之
印刷人　白馬堂印刷㈱